

「神のかたち」であるキリスト

水草修治

序

復活の日の午後、エマオ途上で、主イエスは二人の弟子にモーセおよびすべての預言者から始めて、聖書全体の中で、ご自分について書いてある事柄を彼らに説き明かされた。すると、それまで落胆し冷えきっていた弟子たちの心はうちに熱く燃やされた。神のご計画全体の中にキリストの姿を見出して読むことは、どのようにして可能なか。もし、実際に、そのように読むことができたならば、我々の心にも燃えるものをいただけるのではないか。本稿は、コロサイ書1章における創世記1章の「神のかたち」理解を出発点として、キリストを中心として神の計画全体の理解に展望を開き、心燃やされ宣教に益するようにと書かれた。

I コロサイ書による創世記1章26、27節の「神のかたち」理解

1. 封じられてきた「神のかたち」キリスト論

創世記1章26、27節の人間創造の記事における「神のかたち」とは何を意味するのかについては、古代から多くの議論がなされてきた。創世記1章26節では、「われわれのかたちとして、われわれに似せて (בְּצַלְמֵנוּ כְּדְמוּתֵנוּ)」と、ツェレムとデムートという二つの言葉が用いられ、七十人訳聖書ではツェレム

はエイコーン εἰκὼν、デムートはホモイオーシス ὁμοίωσις と訳され¹、ウルガタではツェレムは imago、デムートは similitudo と訳され²、英語訳では一般にツェレムは image、デムートは likeness と訳されてきた³。本稿では引用文を除きツェレムを「かたち」、デムートを「似姿」と訳すことにする。

オリゲネス(185-254AD)は、『諸原理について』第三巻で創世記1章26節のこれら二つのことばを区別して解釈している。すなわち、神が26節で「我々のかたち、我々の似姿にしたがって人を造ろう」と言いながら、27節で「神のかたちに従って造り」と述べて、似姿については沈黙しているのは、「人間が最初に創造されたときに、像(かたち)としての身分を与えられたが、似姿という完全さは完成の時まで留保されていることを示しているのほかならない。(中略)像としての身分を与えられたことで、始めから完全になることの可能性が人間に与えられているが、人間は終わりの時になって初めて、わざを遂行することによって、完全な似姿を自ら仕上げるべきである⁴。」というのである。

オリゲネスが「神のかたち」について述べていることの中でさらに注目すべきことは、創世記1章における「神のかたち」とは御子であると述べていることである。「では、その像に似姿として人間が造られた神の像として、われらの救い主のほかに何がある。この方こそ、『すべて造られたものに先立って生まれた方』(コロ1:15)であり、『神の栄光の輝きであり、神の本質の完全な現れ』(ヘブ1:3)と言われた方であり、自ら自身について『私は父のうちにおり、父は私の内におられる』(ヨハ14:10)、『私を見た者は父を見たのである』(ヨハ14:9)という方である⁵。

エイレナイオス(130-200AD)もまた、オリゲネスとはやや異なる説明なのだが、創造における「神のかたち」は御子であると述べている。「『……(神は)

人を神の似像として造ったからである。』そして、似像とは神の子であり、人間は(その神の子の)似像に造られたのであった⁶。またエイレナイオスは御子と聖霊を父なる神の両手に譬える独特な聖三位一体の理解に基づいて、御子を「かたち」に聖霊を「似姿」に関係付け、神はこの両手でもって人間を造られたとし、「かたち」は人間においては、肉体⁷・理性・自由・自律性といった本性に見出されるという。他方、聖霊が与える「似姿」とは、肉体の救いを究極的に完成させる神の本性としての「不死性」を意味する⁸。このように、オリゲネスとエイレナイオスが共通して述べているのは、創世記1章における「神のかたち」は御子であるということと、創造における人間は未完成であって終わりの時に究極的な完成を見るということである。

ところが、アウグスティヌス(354-430AD)において「神のかたち・似姿」について、大きな理解の転換が訪れる。アウグスティヌスは、「かたち」と「似姿」の違いには関心を寄せず、むしろ「御父が御子のかたちにしたがって人間を造った」という説を批判して、神が「我々のかたちにおいて」と言われているゆえに、人は一つのペルソナによるのではなく三位一体のかたちに従って創造されたということを強調する⁹。アウグスティヌスがこのように強調しなければならなかったことには背景がある。「御父が御子のかたちにしたがって人間を造った」という理解の仕方では、「御子は御父に似ていないことになる¹⁰」のではないかという懸念があったからである。つまり、御子の神性が割引されて、御子は父と同質でなく、一段下の存在であるというアレイオスの「従属説」の異端に陥ることを警戒しているのである。

「少なくとも使徒以来、キリスト教史の中では、その教説によって千年もの

¹ κατ' εἰκόνα ἡμετέραν καὶ κατὰ ὁμοίωσιν

² "ad imaginem et similitudinem nostram"

³ KJV, RSV "in our image, after our likeness"; NIV "in our image, in our likeness"

⁴ Origenes, *De Principiis*, 3:6:1 (邦訳オリゲネス『諸原理について』小高毅訳、創文社、1978年)

⁵ オリゲネス『創世記講話』小高毅訳(『中世思想原典集成1 初期ギリシャ教父』平凡社、1995年、所収)、518頁

⁶ エイレナイオス『使徒たちの使信の説明』22(『中世思想原典集成1 初期ギリシャ教父』、平凡社、1995年、所収)

⁷ ここにいう肉体とは後に御子が受肉において取る予定のそれを指していると思われる。

⁸ 鳥巢義文『エイレナイオスの救済史神学』(新世社2002年)、92頁参照

⁹ cf. Augustinus, *De Trinitate* 12:6:6, 7 (邦訳、中沢宣夫訳、東大出版会、1975年)

¹⁰ Augustinus, *ibid.*, 12:6:7.

間支配的であった人物は、アウグスティヌス以外にはない¹¹」と J. ペリカンがいうように、アウグスティヌスの神学的権威がその後の教会において絶大であったため、御子が人間の創造における「神のかたち」であるという理解は、その後、長らく教会史のなかで封じられることになったと思われる。千年間どころか、事実上、アウグスティヌスは近代に至るまでカトリック・プロテスタントを問わず西方教会の歴史的信仰に立つ者たちにとって巨大な権威である。そういうわけで、創世記1章の「神のかたち」は御子であるというオリゲネスやエイレナイオスの理解は、中世・近世を通じて封じられてしまった観がある。

中世のスコラ哲学においては、自然と恩寵の神学の枠に合わせて、自然的賜物としての理性と意志の力がツェレム、超自然的賜物として神によって付加された賜物がデムートであるとされるといった解釈上の変化はあるが¹²、御子こそ「神のかたち」であるとは教えられない。カルヴァンは¹³、創世記5章1節と同9章6節において、デムートとツェレムは相互変換可能な語として用いられているので、両者を区別する釈義的根拠は薄弱であるといったことは論じているが、御子が人間創造における範型としての「神のかたち」であるという理解は改革者にあっても忘れられたかのようなものである。

18世紀以降近代の啓蒙主義的な前提に立つ聖書学は、聖書の権威からも解放されているから、アウグスティヌスの権威からも解放された。しかし、近代聖書学は、聖書が全体として統一性ある神の啓示だとは信じず、聖書を成す各巻はそれぞれの時代の文化や執筆事情を背景として成立した歴史的の文書にすぎないことを前提としているので、聖書各巻は、それぞれの書自体として完結しているものとして読まれるべきであるとされる。したがって、コロサイ書1章で創世記1章を解明するなどということは、近代聖書学者にとってはナンセンスなこととされてしまう。その後、K. パルトが示した男女の相互主観的關係の根拠が「我々」と自称される三位一体の神のかたちなのだという解釈は興味深い

¹¹ J. ペリカン『キリスト教の伝統 教理発展の歴史』第3巻（鈴木浩訳、教文館、2007年）、4頁

¹² cf. M. エリクソン *ibid.*, p. 57.

¹³ cf. Calvin, *Commentary on Gen. 1:26/ Inst. 1:15:3.*

ものであるし¹⁴、また創世記の書かれた時代的文化的背景からの解釈として、「王の『像』」がその地にあつての王の権威と存在を代表しているように（ダニエル3:1, 5）、神の『像』である人間は被造物世界における神ご自身の権威と統治を代表するかのようになつて立られている¹⁵」という聖書学者たちの見解は、近代聖書学の方法論をもたらした成果として意義あるものではある。しかし、近代聖書学のパラダイムでは、創世記1章の人間創造に際しての「神のかたち」が御子であるという理解を得ることはできない。

以上のように中世から近世にわたっては、キリスト従属説に対するアウグスティヌスの過度の警戒感によって、そして近現代においては近代聖書学が聖書啓示の統一性を否定したことによって、アウグスティヌスより前の古代教父たちが旧約聖書から読み取っていた、御子が人間創造における「神のかたち」であるという理解は封じられてきたと考えられる。

2. コロサイ書による「神のかたち」の解明

コロサイ書1章15節本文は以下の通りである。

ὅς ἐστιν εἰκὼν τοῦ θεοῦ τοῦ ὁρατοῦ πρωτότοκος πάσης κτίσεως

「神のかたち・似姿」にかんする諸説を見てきたのだが、聖書の統一性・漸進的啓示を信じる立場に立つならば、パウロが記したコロサイ書1章15節「御子は見えない神のかたち」に依拠して、創世記1章の「神のかたち」は端的に御子を指していると理解するのがもっとも妥当であると思われる。

聖書啓示の統一性ということで我々が意味していることは、多くの記者の性格・能力・状況が用いられたにしても、唯一の著者である神がその多くの記者たちを十全な指導によって導かれたことのゆえに、聖書は全体として統一された書として成り立っているということの意味する。聖書啓示の漸進性というのは、神は聖書において真理を一度にすべてではなく少しずつ明らかにされたことを意味する。特に、旧約聖書においては暗示されるにとどまっていた真理が、

¹⁴ K. パルト『キリスト教倫理II』（『教会教義学』第三巻第四分冊）鈴木正久訳、第1章。新教出版社1964年第一刷、12頁以下参照

¹⁵ 藤本満「神の像」（『聖書神学事典』いのちのことば社2010年所収）、245頁

新約において明示されているということである。

コロサイ書1章15節の「御子は見えない神のかたち」であるという記述が創世記1章26, 27節における「神のかたち」を指していることは、次の二点から明白である。第一点は、コロサイ書1章15節は、創造論の文脈で語られているということである。「御子は、見えない神のかたちであり、造られたすべてのものより先に生まれた方です。なぜなら、万物は御子にあって造られたからです。天にあるもの、地にあるもの、見えるもの、また見えないもの、王座も主権も支配も権威も、すべて御子によって造られたのです。万物は、御子によって造られ、御子のために造られたのです。御子は、万物よりも先に存在し、万物は御子にあって成り立っています。」(コロサイ1:15-17) 幼い日から、律法に親しんだパウロが、創造について論じその中に「神のかたち」と記すとき、創世記1章26節、27節を念頭に置いていなかったと想定することは、ほとんど不可能である。コンツェルマンは、コロサイ書1章14節までの散文体が15節から詩文体に変化して20節までがひとつの讃歌となっていることを指摘し、この讃歌は、この手紙の著者の作ではなく、原始キリスト教会において用いられた讃歌の引用であるとしている¹⁶。F.F. ブルースもこの箇所がパウロのオリジナルではなく、原始キリスト教会共通の教えから受け容れたものの一部である¹⁷と考えている。実際、キリストが神性・先在性をそなえた創造者・神を現す方であるという思想は、コロサイ書のみならずヨハネ福音書1章1-3節およびヘブル書1章2, 3節にもあることを見れば、これが原始キリスト教会共通の教えであったという判断は妥当であろう。かりに事実そうであったとしても、パウロがこの讃歌を引用するにあたって、創世記1章27節の創造の記事を念頭に置いていたことは疑い得ない。

コロサイ書1章15節の「御子は見えない神のかたち」であるという記述が創世記1章26, 27節における「神のかたち」を指していることの第二の根拠は、旧約聖書において詩篇やヨブ記も神の創造のわざに言及しているけれども、人の創造における「神のかたち」について述べているのは、創世記1章26, 27節

¹⁶ H. コンツェルマン、*ibid.*, p. 350 参照。

¹⁷ cf. F.F. Bruce, *ibid.*, p. 192.

以外にはないということである。しかも、神の「かたち」という用語に注目すれば、コロサイ書は εἰκὼν という語をあてていて¹⁸、これはパウロが常々用いていた七十人訳聖書が創世記1章27節で「神のかたち」に用いている訳語と同一である。以上の事実にかんがみれば、パウロが「御子は見えない神のかたちである」とコロサイ書1章15節を記したとき、彼の念頭に創世記1章26, 27節があったことに疑いの余地はない。

では、コロサイ書1章の「神のかたち」である御子の役割とはなにか。御子は創造の代理者、保持者であり、目的であると、16, 17節は語っている。大づかみにいえば御子は神と被造物の仲立ちの役割を担われる¹⁹。無限の超越者である神が、有限な被造物といかにかかわりうるのかということは、哲学的難問であるが、パウロは三位一体の第二ペルソナである御子が、有限な被造物との仲立ちを担当しているのだと語っているのである。

このように解釈した場合、アレイオスの従属説に陥るのではないかというアウグスティヌスの懸念を払拭しておきたい。彼は先に述べたように、人は一つのペルソナによるのではなく三位一体のかたちに従って創造されたと強調し、「もし御父が人間を御子の似像によって創られ、したがって人間は御父の似像ではなく御子の似像であるなら、御子は御父に似ていないことになる²⁰」と推論して、御子のかたちにしたがって人が造られたとする説を批判したが、この推論には誤りがある。アウグスティヌスに対して、我々は、「人は御子のかたちに似た者として、したがってまた、三位一体の神のかたちに似た者として、造られたのだ」と応えよう。父と子と聖霊は本質において同一だからである。聖書は、人は御子の似姿として造られたと述べ、かつ、時には男は神の似姿でも

¹⁸ ちなみに、新約聖書のなかで、ほかにキリストが神のかたちであるとするのは、Ⅱコリント4:4一箇所のみである。類似の表現では、「神の御姿モルフエ」(ピリピ2:6)、「神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現われ」(ヘブル1:3)。ただし、ピリピ2:6は口語訳では「神のかたち」、前田護郎訳では「神の形」、塚本虎二訳では「神の姿」、新共同訳では「神の身分」とそれぞれ訳されている。

¹⁹ コンツェルマン『コロサイ人への手紙』p3371976 (NTD 聖書注解『パウロ小書簡』NTD 新約聖書注解刊行会1979所収) p351 参照

²⁰ Augustinus, *ibid.*, 12:6:7.